

## 優秀賞論文要旨

# ヴァージニア・ウルフに見る 「両性具有」の精神

藤 本 梨 沙

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) のエッセイ *A Room of One's Own* 『自分だけの部屋』(1929) は、姉妹版とも言われる伝記小説 *Orlando: A Biography* 『オーランドー—伝記』(1928) とともに女性作家の歴史を中心に「両性具有」の精神を絶妙に描いた評論として最高の評価を得ている。ヴィクトリア朝の父権中心主義の家庭、社会で育ったウルフが覚えた違和感、彼女に女性の解放、特に女性作家の自立への強い関心と決意をもたらした。しかしながら「表現」をする者としてウルフは、女性の権利を勝ち取ろうという実践的なフェミニストではなく、女性の手による「文学伝統の継承」を強く意識した作家であった。本論では、これら二作品を取り上げ、ウルフの「女性文学の継承」という視点から、彼女の創作活動において問い続けたものの一つであった、ものを書く女性の問題点と「両性具有」の精神に焦点を当てて論じたい。

まず第1章では、ウルフの『自分だけの部屋』における「Judithの寓話」とものを書く女性の問題点について考える。シェイクスピアの架空の妹 Judith は兄に劣らぬ才能を備えていたにもかかわらず、芝居をすることも、ものを書くこともできずに女性を取り囲む偏見と障害の中で身を滅ぼしていった。これは単なる寓話ではなく、現実にも彼女のように失意に苦しんだ女性たちはたくさんいたのだ。しかしウルフは、Judith はなおも生きている、と信じ、「彼女に、生き返らせる機会を与える力は、今や私たちの手の中にある」と訴えるの

だった。

続いて第2章では、英文学史のパロディであり、また詩人の精神的成長の物語である『オーランドー—伝記』における主人公の葛藤と、ファンタスティックな性転換について考える。ある日突然女性になった彼／彼女は心身ともに美しく見事な成長を遂げ、「自分」という存在を確認し、そして想像力を備えた詩人となったのであった。

最後に第3章では、「伝記小説」という形式から、ウルフの描いた「女性文学の継承」を読む。「事実」と「虚構」の問題はウルフ最大の関心事の一つであった。単なる出来事の記述や偉人に関する言及だけに偏る「歴史」に対する異議と、オーランドーという個人の人生も「表現する」者の歴史に繋がるのだというメッセージを「伝記小説」を通して読み取ることが出来る。

ウルフが望んだ「両性具有」者が、詩人であり、芸術家となったオーランドーであったのは、ウルフ自身が、芸術家として、対極のものの調和と統一を表す「両性具有」のイメージを通して、「精神の統一」を目指したからであろう。この「両性具有の思想」はフェミニズムという思想を超えた、調和のある、新しい人間のあり方を示すものである。

ウルフは『自分だけの部屋』の末尾で、世代から世代へと次々に渡されていくバトンが、いつの日か必ず Judith に生命を与え、理想の「女性詩人」の手が届くはずだと呼びかける。このメッセージは詩人や作家だけではなく、すべての女性に、「女性の長い列」に連なっている自分自身の位置を意識させずにはおかないであろう。